

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

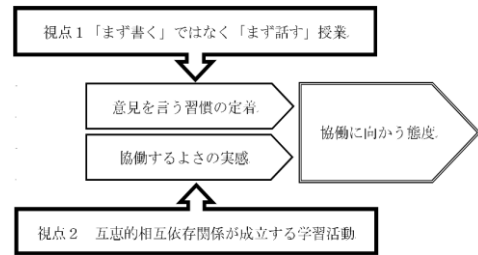
派遣者番号	27K16	氏名	星芝 卓郎
研究主題 —副主題—	児童が他者と協働しながら学ぶよさを実感できる授業の実践 —対話を充実させた小学校国語科の物語教材の学習を通して—		
所属校	武蔵野市立本宿小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>近年、各学校において、不登校、いじめ、問題行動などの学校不適応が大きな問題になっている。その要因としては、学校での勉強のことや家庭のことなど様々な問題が挙げられるが、自身の教員経験から人間関係の問題が大きいのではないかと考えている。教育現場においても、自分の思いをうまく言葉で伝えられなかったり、相手の思いを聞き取り、意図をくみ取ることができなかったりし、人間関係をめぐるトラブルが生じやすくなっている。</p> <p>一方で、コミュニケーションに関する能力の育成を求める社会的要請は日に日に高まっている。経済協力開発機構（OECD）が 2003 年にキー・コンピテンシーの一つとして「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を挙げているように、「知識基盤社会」「多文化共生」と言われている 21 世紀を生きる子供たちに、他者と協働しながら課題を解決していける能力を育てていくことが求められている現状がある。このような現代社会で必要とされる資質・能力は、学校だけで、ましてや教科学習だけで実現できるものではない。学級活動や児童・生徒会の活動、クラブ活動、運動会・体育祭、文化祭などの行事の企画・運営に携わる中で育まれることが多いだろう。それでは、学校生活の中で大きな時間を占める教科学習において、児童にとって他者と協働しながら課題を解決していくことのよさを実感させ、そのような課題解決能力を育むことのできる学習活動とは、具体的にどのようなものが考えられるのだろうか。</p> <p>そこで、本研究では対話を充実させた国語科の物語教材の学習を行うことが有効なのではないかと考え、授業を通じて児童に協働に向かう態度を育むことを研究の目的とした。物語の読み方は人それぞれ異なるので、多様な解釈が生まれる。学級内の友人との対話を通じてお互いの考えを伝え合うことが、自分にとってプラスになり、他者への貢献にもなるような活動が自ずと生じる授業を教師が行うことで、児童に他者と協働するよさを実感させ、協働しながら課題を解決していこうとする態度を育むことができるのではないかと考えた。</p>
II 研究の方法	<ol style="list-style-type: none"> 1 調査研究 都内公立小中学校での言語活動についての学習の実態と、東京都教育委員会ではどのような言語活動を推進しているのかについて調査した。 2 所属校における実態調査 都内所属校（第 5 学年の児童 50 名）において、質問紙により児童の協働作業に対する認識を調査した。 3 考察・仮説 調査研究、所属校における実態調査の結果を考察し、研究仮説を立てた。 4 検証授業の構想・実施 第 5 学年「大造じいさんとガン」（全 8 時間）の単元で検証授業を実施した。 5 検証授業の結果分析 次の手順で効果の分析を行った。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 事前の質問紙調査で全体的な児童の傾向を把握し、協働することに否定的な児童を抽出する。 (2) 検証授業の中で、抽出児童の変容場面を捉え、インタビュー調査を行う。 (3) 検証授業後に質問紙調査を行い、全体的な児童の傾向の変容を検証する。 (4) 事後の質問紙調査において、大きな変容が見られた児童についてインタビュー調査を行う。 (5) 児童の振り返りの自由記述から、児童の認識変容につながったと思われる活動を明らかにする。 6 研究のまとめ 研究の成果と課題を明らかにした。

Ⅲ 研究の結果

次の二つの視点で検証授業を行った。児童にとっては、「書かずにまず話す授業」のイメージとなる。

一点目は、どの児童にも十分な発言の機会を保障し、他者の考えを取り入れながら自分の考えをもてるようにするということである。「まず書く」のではなく、「まず話す」授業を実践する。そうすることで意見を言う習慣が身に付き、相手の話を聞こうとするようになり、対話が促進され、協働に向かう態度を支える基礎的な部分が育まれると考えた。児童に意見を言わせる学習活動を行うために、学習前に児童間の予備知識の差をできるだけ狭め、全員が対等な学習のスタートを切れるようにする。



また、対話を生むための様々な問いを教師が投げかけたり、児童から出させたりする。初めに教師が物語全文を読み聞かせてしまうのではなく、題名や挿絵からイメージできることを話し合わせ、物語の理解に必要な知識をあらかじめ確認しておく。そして、読みながら次の展開はどうなるのか考えたり、児童同士で質問し合ったりすることで、理解を深めていく。

さらに、ひと通り物語を読み終わった後で、主題を考えたり、物語を批判的にとらえたりする。このような学習の流れは、有元が提唱しているブッククラブの指導法を参考にした。

二点目は、他者の意見を取り入れて学習するよさを感じられるような活動を行うことである。グループで合意形成を行う活動ではなく、自分の課題達成のために他者との対話が役立つ実感が得られる学習活動を行う。ジョンソンら（1990）が提唱する協同学習の理論を導入し、互恵的相互依存関係を成立させる学習活動によって協働のよさを実感し、協働に向かう態度が育まれるのではないかと考えた。これらのことを実現するためには、学習の責任が個人にあることを明確に示すことが重要である。毎時間の終わりに学習のまとめを個人で書く活動を設定し、学習活動の責任が個人にあることを示す。自分のグループで話し合ったことを他のグループで伝え合うようなジグソー学習の要素も取り入れる。ジグソー学習が効果的に行われると、他者の意見を自分の言葉で別の他者に伝えることで、他者の意見を自分事として捉えることができるようになる。また、個人で考え、ペア・グループで対話し、学級全体で意見を交流することによって、他者の意見を聞くことで自分の考えが広がっていく実感が得られることをねらった。

以上の視点で構成した検証授業終了後に質問紙調査を行い、児童の協働作業への肯定的な認識が全体的に高まったことが明らかとなった。

Ⅳ 考察

質問紙調査の各項目の数値や自由記述から、ペアや少人数で自分の意見を言い合う活動が多くの子供にとって有用だったと実感されていることが明らかになり、どの子供にとっても意見を言う機会が保障されていたことがよかったことが分かった。また、対話を促す上で物語教材の学習は有効だったと言える。

一方で、この「書かずにまず話す授業」を実践し、多くの課題を感じた。児童に「書かない授業」「まず話す授業」というイメージをもたせることで、対話中心の授業を試みたのだが、それによって「書く」ことの意味や大切さに対する気付きが生まれた。児童にとっては話合いの中でもっと書きたいという気持ちが沸き起こっていて、話し合っただけで得られた意見を書き留めておきたかったことが分かった。他者との対話によって生まれたことを記録しておくことで個人の学びが深まることを実感できたようだ。

今後は児童の様子を丁寧に見取り、児童の様子に応じて自分の意見を書き留めさせてから話合いを進めたり、話合いの間に考えをまとめる時間を設けたりし、児童にどうしたら効果的に学習できるか意見を聞きながら、児童と共に授業づくりを行っていきたいと考えている。

